

子どものひろば

いづまじつしよに ペットとのかかわり

27

渡辺 眞子

すべてのペットたちが、一生をまっとうできるわけではありません。行政のしせつには、無責任な飼い主から捨てられ、死を待つばかりの心細そうな犬とネコがたくさん、冷たいゆかの上でふるえています。

おりの間から、必死に手をのばすネコ。ガラスの向こうから、なつかしそうな視線を送る犬たちに会ったとき、私は言葉をなくしました。ただひたすら「ごめんねさー、ごめんねさー」と胸の中であやまるしかありませんでした。

捨てられた犬とネコが殺処分されるまでの数日間を過ごす動物保護管理のしせつには、もちろん若くて元気なものもいます。が、必ずといっていいほど、

「安楽死」とは、ほど遠い

年離れた二頭や、病気でボロボロになった一匹がいます。ほんの数日前までは愛らしい名前と呼ばれていたのに、そこではすべて「不用犬」「不用ネコ」です。

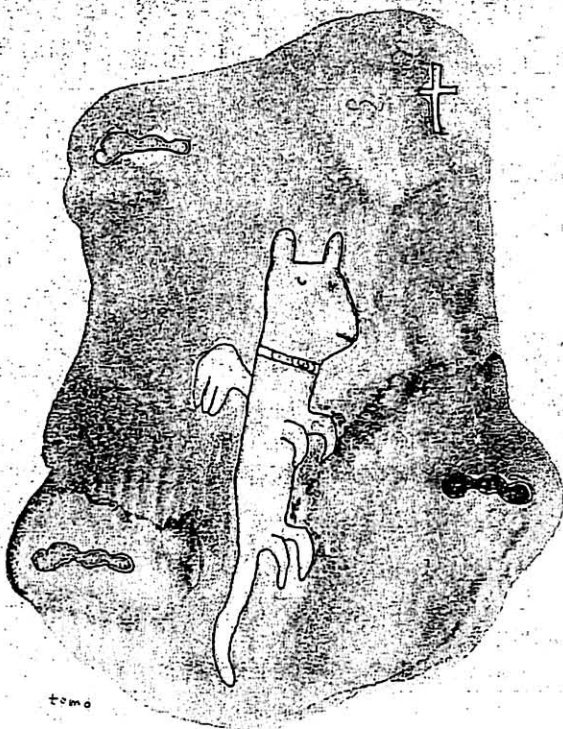


イラスト 太田 朋

「こまでいっしょに暮らしておきなごう、ペットの死をみとらないばかりか、自分の責任を職員におしつける飼い主に、強いいかりを感じました。

保健所で行われるのは安楽死だと思っている人がまだいるようですが、それはまちがいです。動物の殺処分には使用される二酸化炭素ガスでは、安楽には死ねません。せまく暗い処分機におしこまれた犬と

ネコは、苦しみなごう息絶えてゆくのさ。かれらのために、なみだを流してくれる人はいません。職員の方々にとっては、たえ難い作業です。

動物たちの遺体は、高温の焼却炉で焼きつくされます。二〇〇〇年度のデータによると、一年間で殺処分を受けた犬は約二十五万びき、ネコは約二十八万びきでした。一日に、約千五百ひきもの犬とネコが命をうばわれていることになります。

かれらの骨が入ったふくろの横に色とりどりの首輪がまとめられているのは、燃えるごみと燃えないごみを分別するためといつことさ。これが、かつては家族の一員であったはずのペットの最期の姿です。

(作家)